

Title	デカルトよりヴィコへ
Sub Title	
Author	青木, 巖(Aoki, Iwao)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1928
Jtitle	哲學 No.4 (1928. 8) ,p.119- 164
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000004-0119">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000004-0119</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# デカルトよりヴイコへ

青 木 巖

<sup>(1)</sup>Hieraus folgt, dass in dem naturwissenschaftlichen Denken die Neigung zur Abstraktion vorwigt, in dem historischen dagegen diejenige zur Anschaulichkeit, Anschaulichkeit, d. h. individuelle Lebendigkeit der ideellen Gegenwart für das Auge des Geistes ganz ebenso wie für das des Leibes.

—

私がヴイコの名に注意を拂ふに至つたのは、實に偶然なる機會によつてであつた。それは、曾つて私が所謂「ホメーロス問題」Homeric Frageなるものを研究してゐた時、始めて私の注意を促した名前であつた。ホメーロス問題とは、云ふ迄も無く、恰も聖書の高等批評の如く、批評の餘地なきかの如くに傳り來りし、ホメーロスの

作とせられてゐる詩の歴史及び構造に關して提出されたる數多き問題である。尤も此問題は古くよりその端を發すると云ひ得るが大體に於て一七九五年に、フリードリッヒ・アウグスト・ヴルフが著したる『ホメーロス緒論』Prolegomena ad Homerumなる一書に勃興したるものと見ていゝのである。然るに、ヴィヨは既に早く一七四四年にその第三版を出せし『新科學の原理』Principi di una scienza nuovaに於て其問題將來の進展に對する一使喚を與へてゐたのである。

勿論私は此處に斯かる方面よりヴィヨを考察しやうとする者ではない。この小論に於て敘述せんとする對象は、如何に異なる意味に於てヴィヨも亦デカルトと等しく西洋近代哲學史の劈頭を飾るべき人物であるかを示す事である。

大體に於て、文藝復興期以後の伊太利の哲學者は、殆んどアルプス山脈を超えて、西歐に盛名を馳せてゐる者はない様である。然し、是を以て直ちに當時の伊太利思想界が所謂暗黒時代であつた事を暗示するものと考へてはならない。私の次の小論が幾分にても、此點を明かにする所があれば幸甚である。

殊に、『現代哲學』なる表題の下に、興味深く識見鋭き一書をものしたるかのルッジエ

ロをして、『カントへの非凡なる豫告』il geniale presentimento di Kantと迄稱揚せしめたる、吾がジャムバティスタ・ヴィコが、何故廣く知らるゝ事が出来なかつたのであらうか。例へば、特に、ヴィコが排撃して罷まなかつたデカルトが、斯くも認められ斯くも卓拔なる地位を哲學史上に占むるに對し、何故ヴィコは省られなかつたのであらうか。『<sup>(三)</sup>デカルトが近代哲學の創始者たるは、方法の思索を主眼點としたる事に由るのではなく、寧ろ、その中に新しき問題を把握したる事に依る。』と云はれてゐるが、此意味よりすれば、正にヴィコも亦、近代哲學の創始者の一人に數へ入れらるべき人物である。少くとも、哲學史上に彼の爲め相當の頁を割く事が至當であると考へる。現代のデカルト研究は、かのナトルプ等の時代と異り、デカルトの劃期的にして獨創的なる思索家としての聲名を、稍々低下せんとする傾向を有つてゐるが、而して、勿論此問題はそれ自體にて立派なテーマであるが、私は、此小論に於て、ヴィコの哲學的勞作を敘すると共に、與ふ限り劃期的にして獨創的なる思索家としての彼を、指摘して見る考へである。

冒頭に一言して置くが、私は、フュラリ、ニコリニ或は其他の權威ある Opere Complete

に接する事が出来なかつた事を甚だ遺憾とする者である。以下私の引照するヴィ  
 コの著作は、殆んど總てミシユレーの佛譯からである。尙ほ合せて、クローチエゼンティ  
 ー、フリンツ諸教授の著に、教示されたる事多きを傳へて置く。

(一) W. Windelband, Präjudien, Band 2, Tübingen 1924 S. 150

(二) G. de Ruggiero, La filosofia contemporanea, Vol. II. Bari 1920 p. 93

(三) E. Cassirer, Das Erkenntnisproblem, Band 1, Berlin 1922 S. 440

二

フリンツ教授は、以上の何故ヴィコ思想が廣汎なる傳播を享けなかつたかとの  
 問に對し、『彼の思索の徹頭徹尾イタリア風なる事』に起因する所多大なりと説いて  
 ゐるが、是は確に至言である。實に、ヴィコは思索上の偉大なる國家主義者であつた。  
 彼がデカルトの思想を排斥し去つたのも、幾分デカルトがフランス人であつた事  
 に、起因するのではないかと、想はれる程である。

『この新しき方法は、イタリア人の精神に對してと云ふよりも、寧ろフランス人の  
 精神の爲に作られたものである』と、叫んでゐる。然し、彼は、この思索上の國家主義

を出發點として自らの思索展開への第一步を踏んだのであつて、決して鎖國的攘夷論者ではなかつたのである。

彼のこの思索上の國家主義を了解する爲に、吾々は、當時の伊太利思想界を一瞥しなければならぬ。所謂文藝復興期に於て、イタリアが絢爛たる文華を生み出したる事は述べる迄もない事であるが、ヴィコの生時に於けるイタリアは、恰も火の消えたる後の如き觀を呈してゐたのである。テレジオ、カムパネルラ、ブルノー、カルダーノ、ノー等には、その適當なる後繼者はなく、唯僅かにガリレオの後繼者として、カステリ、トリチェリ等が存したのみで、従つて、當時の伊太利思想界は、アルブスを超え來りし外國思想の風靡する儘に放任されたる形であつた。當時の狀景をヴィコは、その自敘傳に於て次の如く述べてゐる。

「この學說と智識とを以てヴィコは、恰も外國人の如く、その生れ故郷なるナポリに歸つたのであるが、其處に於て、彼は、秀れたる學者達がデカルトの「自然哲學」を此上なく賞揚してゐるのを發見した。アリストテレスの「自然哲學」及びスコラ哲學者によつて要らざる變更を加えられたるアリストテレスの「自然哲學」は、既に一

種の小説となつて終つてゐた。十六世紀に於て、マルシリウス・フィキヌス、ピコ・デラ・ミランドローラ、ニフォスとステュキオの兩人のアウグスティヌス、マツツォニ、パツリッチ等に、甚だ崇高なる教養を與へ、又詩、歴史、及び辯術に對し、あの最高の文化に到達したる時代の全ギリシヤがイタリアに再生したるが如く想るゝ程、力を與へたる形而上學も唯僧庵に閉鎖さるゝ價值しかないとせられてゐるかの様である。……彼等は、プラトーンにも、プロティノスにも、亦十六世紀に華々しく活躍せしフィキヌスにも行かず、實にデカルトの「瞑想録」に走つてゐたのである。……人々は、スコラの論理學を彈劾して、その代りにユークリッドの「幾何學綱要」を賞揚してゐた。醫學は理學の頻繁なる變更の爲め懷疑論に陥つてゐた。……甚だ卓拔なる學者カルロ・ブランヌス氏は、よき詩の榮譽を回復したが、然も、彼はそれを餘りに狭き範圍に限定し、唯僅かにカザのジッヅァンニを模倣するに止まり、ギリシヤ或はラテンの泉より、又はペツラルカのリローメの清澄なる溪流より、或はダンテのカンツォニの大奔流より、優雅や力を汲み出す事をしてはゐなかつた。』

又、ヴィッレの教父への手紙にも「哲學者達は、デカルトの方法によつてその天分を

麻痺されてゐるかの様である。彼等は、デカルトの所謂明晰にして判明なる認知に同意し、是を以て、倦まず撓まず、全世界の總ての圖書館に比敵するものである、となしてゐる。」と嘲つてゐる。

斯くヴィコの慨嘆する如く、彼の眼には、當時の伊太利が、文學的にも科學的にも、其他凡ゆる學問より見るも、荒蕪の地の如き狀景を呈してゐたのである。然も、吹き荒ぶものは、アルプスより吹き下すデカルト學派の普及のみであつた。

先に述べたるが如く、ヴィコがデカルト學派を排撃したのは、幾分その思索上の國家主義的氣風に依るのであるが、然し是には、更に強固なる根據のあつた事は申す迄もない。デカルト風の唯理主義と、ヴィコがその一生を通じて展開したる思想とは、根底に於て相異なる精神の二つのコースであつた事に起因するからである。即ち、デカルト主義の決定的戦利は、數學的精神の、風靡を意味すると共に、歴史、言語學、法學等の所謂精神科學の頽廢を意味する、とヴィコは觀察したのである。尤も事實もそうであつたが。然も、ヴィコが、その家庭的にも社會的にも恵まれなかつた一の殉教的な一生を通じて、成就せんと努力したるは、實に精神科學の基礎づけにあつ

たのである。ヴィコの思想展開史を辿る上に有力なる文獻である所の、「現在の學術研究の方法に就て」*De nostri temporis studiorum ratione*なる小論文に、彼は「併し乍ら、現在の近代的學問討究の最も不都合なるは、倫理科學を犠牲にして自然科學を研究し、殊に倫理科學のうちでも人間精神の情態、美德及び惡徳の固有本質、心性の年齢、環境、家族、個人の生地等に從つて異なる事等を教ゆる部分を省みない」と云ふ點である。」と述べ、精神科學研究の懈怠こそは、デカルト主義最大の缺陷であるとなしてゐる。

斯く一面に於て、當時の伊太利思想界を風靡しつゝあつた最大勢力なるデカルト學派を排斥すると共に、ヴィコは、他面、同時にアルプスの南を浸蝕しつゝあつた、エピクテロスの流れを汲めるガッサンディ學派をも反撥し去つたのである。「彼がナポリを離れた當時、ピエール・ガッサンディの著書を通じ、エピクテロスの哲學が研究せられ始めてゐた。而して、二年後には、青年等がその禮讚に夢中になつてゐる事を知つた。」とは、彼の回顧する所である。で、ヴィコも亦ルクレティウスの詩を通じて此哲學を研究したのであるが、それが『婦女子の單純にして薄弱なる精神を満足さす

哲學』 una filosofia da soddisfare le menti corte di fanciulli, e le deboli delle donniciuole に過ぎない事を發見し、到底人間精神の活動を説明し得べきものでないとの結論に到達してゐる。注意すべきは、彼がエピクローロスの論理説を以て、『孤獨に生存すべき人々にとつてのみ適當せる』 buona per uomini, che debbon vivere in solitudine と評してゐる事で、此處に於ても、既にヴィコは、デカルトに對する場合と同方向の反對論を以て、彼の思想の根底よりして、ガッサンディ説を承認し得ざる事を暗示してゐるのである。

「<sup>(モ)</sup>ヴィコのイタリア性 italianità の甚だ顯著なる特性は、伊太利精神が外國文化の從屬者となつて、アルプスの彼方、特に全フランスを支配しつゝあつた思想を、受動的に歡待しつゝあつた際に、當時の文化に對し、否定的にして挑戰的態度を持した事に現れてゐる。其思想とは、哲學に於て、ガッサンディの原子論とデカルトの數學主義 *matematicismo* なる二形態に於て出現したものである。而してヴィコは、原子論の唯物論的にして自然主義的なる直觀に對しては、歴史の理想主義的にして人間主義的なる觀念を、又、數學的直觀と演繹の對象なる明晰確實なる理念の抽象的思索に

對しては、自己の世界を創造しつゝ發展し、又その世界の中に、自己自らを創造しつゝ進んで行く人間の自主的經路を、主張してゐる。』とは、甚だ學究的なる『ヴィニコ研究』 *Studi Vichiani* なる一書をものせるゼンティールの明言である。

尙ほ、ヴィニコの名譽の爲に附言して置くが、彼は決して、彼のデカルトの勇敢にもなしたる大功績を、徹底的に葬り去らんとするが如き偏狹なる人物ではなかつたのである。『疑ひもなく、個人意識を以て眞理の準律としたるデカルトに、吾々の負ふ所は多大である。總てを權威に歸せしめるは、餘りに卑しき奴隸である。吾々は、思惟を方法に従屬せしめんとする點に於て、デカルトに負ふ事多大である。スコラ哲學の有する秩序は無秩序に外ならない。』とは、彼の『伊太利文人新聞』 *Giornale dei letterati d' Italia* 中に現れし、彼の著『伊太利人の原始智識に就て』 *De antiquissima Itarorum sapientia* に對する反駁の答辯中に告白する所である。唯、彼の肯定し得ない點は、其處にも述べてゐる様に、『個人を以て唯一の判斷規準とし、總てを幾何學的方法に従屬せしめる』點なのである。

(1) R. Flint, Vico, London 1884, p. 4

- (11) J. Michelet, *Oeuvres choisies de Vico*, Paris, ed. déf. p. 153
- (12) Giambattista Vico, *Principi di una Scienza Nuova, con annessa l'Autobiografia*, Milano, p. 275-276
- (13) *Oeuvres de Vico*, p. 170
- (14) *Ibid.* p. 151
- (15) *Vita di G. Vico* p. 271
- (16) G. Gentile, *Studi Vichiani*, Firenze 1927, p. 108-109
- (17) *Oeuvres de Vico*, p. 168

三

偕て、以上私は、ヴィコが一面デカルト學派に對し、又他面ガッサンディ學派に對し、反撥的態度を採つた事を述べたが、先に述べたるが如く、此反撥的態度は、實は彼自身の思想展開の第一歩であつた。『ヴィコの哲學』に就て恐らく最も優秀なる紹介をなせしクロイチエの敘述方法は、此點に於て最も賢明である。即ち、クロイチエは、ヴィコの認識論を二形相或は二階梯 *due forme* に分ち、其著の冒頭に於て、『ヴィコの認識論の第一の形相は、デカルト主義に對する直接的批判及び反指定として現れてゐる』とし

てゐるのである。私もこのナポリの哲學者の賢明なる導標に従つて、それが又最も便宜なりと考へるが故に、ヴィコのデカルト批評より進み度いと思ふ。

總括的に見て、ヴィコのデカルト批判は、數學的方法の問題、真理の問題、及び従つて精神科學の問題に盡きてゐないかと考へる。勿論、是等三個の問題は、各々不離の關係に立つものであつて、全體として一體をなすものである。

(1.) B. Croce, *La filosofia di Giambattista Vico*, Bari 1922, p. 1

四

一言して置くが、私は今嚴正なる歴史的批判の下に、デカルトの思想を論じやうとする者ではなくて、唯ヴィコのデカルト批判との關聯に於てのみ、又ヴィコの批判の祖上に上りしもののみを論じて見度いと思ふ。

デカルトに於て、果してその克明なる *methodisches Denken* と共に *Methodenlehre* が體系的に敘述されあるや否やは別問題として、デカルトが所謂西洋近代哲學史の劈頭に光榮ある座を占めてゐる根據が、その『數學<sup>(1)</sup>を典型としたる新しき方法に據

る諸科學の根本的改革』に存する事は、何人も等しく認める所である。數學、特に幾何學である。これは、云ふ迄もなく、デカルトにとつて數學的認識が確實にして疑ふべからざるものであつたからである。彼が或幾何學的方式を常にその *coëffice ergo sum* と併記してゐる事よりしても判明するし、又、或場所には、次の如くその裏書とも見るべき事を述べてゐる。『甚だ單純にして普遍的なる事柄をのみ取扱へる算術、幾何學及び此種の學問は、何ものか確實にして疑ふべからざるもの *quelque chose de certain et d'indubitable* を有してゐる。蓋し、私が目覺めてゐやうと、眠つてゐやうと、二と三を加ふれば常に五なる數を構成し、四邊形は決して四邊以上を有しないであらうから。で、斯くも明晰にして歴然たる眞理が、何等かの虚偽或は不確實の嫌疑を受けるとは、考へ得られない。』

斯く、數學を以て最も確實なる學問となす思想は、かのアカデミーアの門に『幾何學の智識なきものは入るを許さず。』*ἀγνοήτων μαθημάτων εἰσὶν ἀπέχρηστα* と書かれし時代より以降、中世紀を通じ、殆ど哲學の傳統となつたものである。然るに、ヴィヨは敢然と斯かる傾向——其傾向は然も當時に壓倒的勢力を有つたものであるが——に

抗して立つたのである。而して、ヴィユが斯かる傾向に與しなかつた事には、後に判明する如く、二個の認識論的根據があつたと考へられる。即ち、彼は、一にはスピノザの所謂『幾何學的系列の下に論證する』ordine geometrico demonstrare 方法が唯一の方法でないとなし、二には、その方法そのものの理據を問題としたのである。

次に、デカルトは、真理の問題に就てメルサンヌに、『自分は、真理なるものが無視され得ない程、絶對的に明確なる概念である事を、未だ曾つて疑つた事はない。』：人、は、真理の本質を知らしめる論理的定義を與へる事は出來ない。』と書送つてゐるが、その『方法論』に於ては、次の如き形式の下に真理に就て述べてゐる。『第一の掟律は、私が明確に斯様なものであると認識しないものは、何ものも是れを真理として許諾しない事であつた。即ち、注意して躁急と偏見とを避け、私が絶對にそれを疑ふ事が出來ないと言ふ程、私の心にしかく明晰に又しかく判明に *si clairement et si distinctement à mon esprit* 映じたるもの以外、何ものをも私の判断中に肯定しない、と云ふ事である。』又、彼は同書に於て、『吾々が甚だ明晰に且つ甚だ判明に認知するものは凡てこれ眞なり』との掟律を以て、一般法則となす事が出來たと書いてゐる。

る。然らば、その『甚だ明晰にして判明なる認知』とは何であるかと云ふに、これは、彼の『規則論』 *Regulae ad directionem ingenii* に於て直観或は心の直観 *intuitus mentis* と稱せられてゐるものである。而して、其處に於て、彼は先づ『人間にとつて、真理の確實なる認識に對しては、明確なる直観と必然的演繹以外に、他の路は開けてゐない。』  
*Nullas vias hominibus patere ad cognitionem certam veritatis, praeter evidentem intuitum et necessariam deductionem.* と云ふ點より出發してゐるのであるが、デカルトに於ては、『吾々が一のもの<sup>(七)</sup>を直接に他より演繹したる場合、常に、若しもその推理が明確ならば、既に眞の直観に還元されてゐる。』 *quaecumque una ex aliis immediate deduximus si illatio fuerit evidens, illa ad verum intuitum jam sunt reducta.* のであつて、演繹も結局直観に還元さるべきものである。故に、又ヴィニコとの關聯に於て直観のみ重要なのであるから、私は、今直観のみに就て述べる事にする。直観とは、デカルトに依れば、『唯、理性の光より生れる純粹にして注意深き精神の疑ひなき認知』 *mentis purae et attentae non dubium conceptum, qui a sola rationis luce nascitur* である。偕て、此處でヴィニコが問題にしてゐるのは、——繰返して云ふが、私は嚴正なる史的見地に立つてデ

カルトを考察してゐるのではない。——眞理の認識を斯く直観として終へば、結局、一には所謂 Solipsismus に陥る危険がありはしないかと云ふ事と、二には理性を單に受動的なるものとして終ひはしないかと云ふ點である。

此第一の疑問に對し、ヴィヨは肯定的觀察を下し、フランチェスコ・ソルラへの手紙にも、『<sup>八九</sup>デカルトの所謂明晰にして判明なる知覺と稱する眞理の規準は、エピクトロスの規準より不確實なものである。實際、凡ゆる情緒が生産なし得る、この個人的明證に對する信頼は、容易に懷疑思想に導き去るものである。』と云つて、デカルトを難じてゐる。斯かるデカルト批判は、嚴正なる非難とは考へられないが、然し、一面デカルト自身もこれには責任があると云はねばならない。即ち、彼はガッサンディに對する答辯に於て、次の如く書いてゐる事さえあるのである。『自己の思惟がもの眞理の規準ではない、と云ふ言葉の中には疑義の存する事を、特に此處に指摘しなければならぬ。蓋し、若し以上が、私が或事を眞なりと考へる理由に依つて、私の思惟が他人にそのものを信ぜしめんが爲の他人にとつての規準となつてはならぬ、と云ふ意味なれば、私は全然同意する。併し、此處にそれは問題とならない。』

何となれば、私は未だ曾つて他人を自分の權威に屈從せしめんと欲した事はないからである。寧ろ反對に、私は、色々の機會に於て、人は唯、理性の明證によつてのみ、納得しなければならぬと告げ來つたのである。私の主張する所は、各個人の思惟、即ち彼がものに就て所有する知覺或は認知が、彼にとつてそのものの眞理性の規準でなければならぬと云ふ點である。』…… Je dis que la pensée d'un chacun, c'est-à-dire la perception ou connaissance qu'il a d'une chose, doit être pour lui la règle de la vérité de cette chose.

第二の疑問に對して、ヴィヨ自らが此疑問を肯定するが如き解釋を下してゐるのではないが、唯ヴィヨとの關聯に於て、便宜上、私が斯かる疑問を提出して見たのである。此疑問に依れば、デカルトの直觀と稱するものは、究極に於て中世紀の所謂「自然の光り」*lumen naturale*であつて、而も受動的なるものであつて、直觀主義に陥れば、精神の自主自足的なる獨創性は認められなくなり、はしなやかと言ふ。「深く神祕思想に貫徹されたる、直觀主義者デカルトにとつて、理性は、唯恰も蠟が封印の型を受けるが如く、ものの印刻を受け、是を保つ所の、一の受動的はたらき *eine passive*

Fähigkeit に過ぎない、而して、その力はそれ自身の光に非ずして、寧ろ神の光によつて照明されるのである。』とは、強ち強牽なる説でもない。蓋し、デカルト自らも、その書簡の中に次の如く明言してゐるのである。『直観認識は精神の照明であつて、その照明によつて、精神は神よりの光の中に、吾々の理性に來る神の明晰性の直接印象によつて、精神が発見する事を神の嘉するが如き、事物を見るのである。此點に於て、吾々の理性は能動者と見做さるべきものではなくて、單に神よりの光を受納するものと見做さるべきである。』…… qui en cela n'est point considéré comme agent, mais seulement comme recevant les rayons de la divinité.

實に、この第二の點こそは、ヴィユの發足點となるものであつて、又この點に於ける差異こそは、兩人の思想方向の分岐點をなすものである。デカルトもヴィユも共に、感覺主義的懷疑論に對して反對したる點に於ては一致してゐるのである。唯、その懷疑思想克服の道程が異つてゐるのである。併し、結果に於て等しきものがあつたとは云へ、その道程の差こそは實は本質的のものであつた。デカルトは、その方法的懷疑に依つて、*Cogito ergo sum*なる直観に到達し、遂に所謂明晰判明なる認知

を以て確實性の原理となし、以て懐疑主義を克服したのであるが、是には、以上見るが如く、一面精神のはたらきを受動的なものと墮して終ふ危険が存するのである。然るに、ヴィヨは是に對し人間精神が單に受動的なるものではなくして、實に『真理即ち生産されたるもの』 *verum ipsum factum* なる思想を振翳し、歴史主義を以てそれを克服したのである。彼言ふ。『懐疑主義<sup>(十一)</sup>を覆す唯一の手段は、吾々が、人は自己自ら生産したる真理に就て確實であると云ふ事を以て真理の規準としてゐる一事である。』

- (一) K. Fischer, *Gesch. d. n. Philosophie*, Band 1, Heidelberg 1897 S. 156
- (二) O. Hamelin, *Le système de Descartes*, Paris éd. 2, p. 116
- (三) *Lettre à Mersenne* 16 Oct., 1639
- (四) *Oeuvres choisies de Descartes*, Paris Garnier ed., p. 14
- (五) *Ibid.*, p. 25
- (六) *Reg. XII*
- (七) *Reg. VIII*
- (八) *Reg. III*
- (九) *Oeuvres de Vico*, p. 175

- (十) A. Koyre, *Descartes und die Scholastik*, Bonn 1923 S. 51  
(十一) *Lettre à M. de Newcastle* 1648  
(十二) *Oeuvres de Vico*, p. 227

## 五

クロチエが華々しくヴィヨを紹介してより、ヴィヨの歴史的地位に就て色々論ぜられ來つたが、就中カトリック方面の學者は、ヴィヨの獨創性、従つて歴史に於てヴィヨが當然占むべきものとしてクロチエが確認したる地位、——而してその地位は本論に於て私も確立し度いと願つてゐるのであるが——を疑ひ出したのである。クロチエはそれに對し、簡單ではあるが明確な小論文『ヴィヨの認識論の源泉』 *Fonti della gnoseologia Vichiana* を以て應じてゐる。此論文はクロチエ哲學論集第三卷となつてゐる『ヘーゲル論』 *Saggio sullo Hegel*, Bari 1913 中に、有名な『ヘーゲル哲學に於ける生けるものと死せるもの』等と共に收められてゐる。此論文に於てクロチエが示したる如く、文章上の或は斷片的なる類似が、ヴィヨに及びたるフィキヌス、カルダー

ノ、コルネリウス、オッカム、ドゥンズスコートゥス等の決定的影響を指示するかの如くであるが、彼の科學論、眞理論は、結局彼自身の創意にかゝるもので、如何に彼の學說が『全然斬新なる』*tutto nuova*かを示してゐるのである。

然し、私は、——此場合私はヴィコの初期の所謂『第一相』*prima forma*の思想を考察しつゝあるのであるが——ヴィコが徹頭徹尾プラトーン主義者であつたと云ふのではないが、寧ろ、プラトーン主義が彼の思索の出發點をなし、殊に、『彼の思想がルネッサンスのプラトニズムに胚胎してゐる。』となすものである。此意味に於て、私は先のマルシリウス・フィキヌス等は、ヴィコ哲學の考察に當つて無視すべからざる人物であると考へる。是は後に判明する事であるが、前述のデカルトへの反撥も、歴史的には彼の初期の思索を支配してゐたプラトーン思想乃至新プラトーン思想の反撥であるとする事が出来るのである。蓋し、『後者が一者、イデア、或は神に向つて客觀者として又眞理として進むに對し、前者は是に反し、思惟に向つて主觀者或は確實性として進んで行く。』*In quanto questa è orientata verso l' Idea, o Dio, come oggetto o come verità; quella invece verso il pensiero, come soggetto o certezza* ヲ

リッス・フィキヌスは『幾何學的精神は自己の内部より空想的材料を構成す』*Geometria mens materiam intrinsecus phantasticam fabricat* となし、以てヴィニコが後に科學批判をなせし際に重要な契機となりたる、幾何學の對象は假空なり、との思想を暗示したのである又、他面フィキヌスは、神の慧智 *divina sapientia* と人間の智識とを峻別し、後者は認識によつてもものを創造しないが、前者は『もの原因なる故に認識し』*cognoscit quoniam ipse est causa rerum* 従つて、前者に於ては認識と創造とが一致する事を指摘し、以てヴィニコの思想全般に不可缺的要素となりたるものを暗示したのである。

(一) O. Klemm, G. B. Vico als Geschichtsphilosoph und Völkerypsycholog, Leipzig 1906, S. 12

(二) G. Gentile, op. cit., p. 40

## 六

ヴィニコの認識論研究上の最も重要な文獻と稱すべき『伊太利人の原始智識に就て』なる論文の結辭として、彼は次の如く説いてゐる。即ち彼の提出せるものは、『人間に總ての眞理を許さない——尤も總ての眞理を拒否すると云ふのではなくて

單にそのうちのあるものであるが——人間の脆弱性に適當せる形而上學であり、又、神性の眞理と人間の眞理とを分別し、人間の智識を以て神性なるものの規準と見做さず、寧ろ、神性なるものをして人間的なるものを制約せしめる、基督教の敬虔心に調和せる形而上學である。』と述べてゐる。これは明かに結辭であるが、然し一面彼の思索出發の宣言でもあつた。

ヴィニコに依れば、神は全智であつて、恰も赫々たる太陽の照明の中にもものを見るが如くであるが、是に對し、人間の認識は、恰も鳥羽玉の闇の中に提燈の光によつてもものを見るが如きものである、と言ふ。故に、眞の智識、眞理の眞理は神にのみ存し、人間に許されたるは唯第二次的智識であり、第二次的眞理である。然らば、何故に神のみが斯くも原理的であり得るのであるか。是に對し、デカルトをも獨斷論者として獨斷論を最も忌避したるヴィニコに於ては、認識論的根據が存したのである。彼は、先づ認識を理解 *intelligere* と思惟 *cogitare* とに分ち、次で以下の如く論じてゐる。

『斯くて、讀む *legere* (本來は集めると云ふ字) と云ふ事が、言葉を構成する書かれた

る要素を集める事である如く、理解するとは、ものの總ての要素を集める事である。……真理は即ち作られたるものである。 *verum ipsum factum* 従つて、神は最初の創造者 *factor* なるが故に、最初の真理であり、總てのものを創造したるが故に無限の真理であり、且つ、外的たると内的たるとを問はず萬有の凡ゆる要素を自己のうちに包藏して、萬有の凡ゆる要素を顯現するものなる故に、絶對的真理でもある。知る *scire* とは即ちものの要素を集める事である。故に、思惟 *cogitatio* は人間に適當せる認識であり、又理解は神の認識である。蓋し、神は外的たると内的たるとを問はずものの凡ゆる要素を包攝し、且つ是を統制し以て結合してゐるからである。然るに人間の精神は限定されて居り、且つ、總ての自己以外のものとは離別的關係に立つ故に、ものの外縁にのみ觸れて總てを包合し得ず、従つて、ものを思惟する事は出來るが理解する事は出來ない。此故に、人間の精神は理性 *ratio* に參與するがそれを所有するものではない。是を例證すれば次の如くである。即ち、神性なる真理は塑像の如くものの立體的映像であるが、人間の真理は、繪畫の如くに一元的なる平面像である。而して、正に神性真理が、神がその認識する事に於て處理し生産

する所のものであるが如く、人間の眞理も、人がその認識に於て統制し創造する所のものである。斯く智識は、ものが生産される方式の認識であり、又、精神は、認識に於てもものの要素を組成するのであるから、智識とは精神が自らものを創造する方式の認識である。神は萬物を理解する故に、ものは神に對して主體的であり、外面のみを了解する人間にとつては平面的である。以上確立されたる點をして吾々の宗教と遙か容易に和解せしめんが爲には、イタリヤの古代哲學者達が、世の永劫性を信じたるが故に、眞理と作られたるもの *factum* とを同一視した事を、知らねばならない。……神は、以て萬物を構成せる要素を自己のうちに包藏するが故に、全智である。然るに、人間はものを知らんが爲にもものを分割してゐるのであるから、人間の諸學は、自然の成業に對する解剖の如きものである。是を例證すれば、人間を肉體と精神とに、精神を智性と意性とに二分してゐるが如きものである。更に、それは物體より形像、運動等を分ち、或は所謂抽象し、而して是等及び總ての他のものより、實在と單位とを曳出したのである。斯くて、形而上學は實在を、算術は單位及びその増倍を、幾何學は形像と其空間的三次元を、機械學は外部の運動を、理學は

中心より發する運動を、醫學は身體を、論理學は條理を、倫理學は意欲を考察するのである。……此實在、單位、形像、運動、身體條理、意欲も、神に於ては統一されてゐる。……斯くて人間の智識は、人間精神本來の缺陷より生じて來る。蓋し、人間の精神は異常に限定されて居り、總てものの外部に留まり、その認識せんと欲するものを一も包藏せず、從つて、渴望せる真理を生産し得ないのである。併し、この本元的缺陷を消滅して、創造によつて神の智識に近似する智識乃至學問こそは、最も確實なものである。

以上の論據に依つて、真理の規準、真理認識の掟律は、それを生産したと云ふ事である、と結論出來る。從つて、吾々の精神の明晰にして判明なる觀念は、真理の規準たり得ないのみならず、吾々の精神自體の規準ともなり得ないものである。……偕て、人間の科學は抽象を基底としてゐるのであるから、物體にかゝるに從つて、その確實性を減ずるのである。斯くて、機械學は機械によつて實現されたる運動を校査する故に、幾何學或は算術よりも遙かに不確實である。』

以上に依つて、吾々は、グイコが先づ『真理と生産されたるものは互に兌換される』

*verum et factum convertuntur* と云ふ命題を出發點とし、従つて眞理は根元的生産者なる神にのみ屬し、人間には唯抽象的智識なる思惟のみが許される、となしてゐる事を知るのである。『イタリア文人新聞への答辯』の最初のものにも、『先づ私は眞理が作られたるものと互換される事を確立し、従つて神に於て、總て作られたるものが包藏されてゐるのであるから、神に於てのみ唯一の眞理が存する事を認めてゐる。』… *e quindi raccolgo in Dio esser l'unico vero, perché in lui contiensi tutto il Fatto* と述べてゐる。

アリストテレスに依れば「科學<sup>(三)</sup>とは原理及び原因に關する智識である。』*ἡ σοφία περὶ τινὰς ἀρχὰς καὶ αἰτίας ἐστὶν ἐπιτομή* と云ふが、*ἡ σοφία* に依れば、眞智識とは、單に原因の智識ではなくして、原因によるものである。 *Vere scire est per causas scire* 此點は、フリント教授其他の或ヴィヨ研究者の明白に辯別してゐない處であるが、私には確に以上は辯別すべきであると考えへる。 *ἡ σοφία* に依れば、眞智識とは生産されたものより遡つての原因に關するものではなくて、生産そのものに於て成立するものであるから、原因の智識ではなくて、原因によるものでなければならぬ。蓋

し、彼に於ては、原因に依つて *per causas* 認識するとは、生産すると云ふ意に外ならなかつたからである。彼云ふ。『蓋し若し眞理が作られたるものであつて、又原因に依つて知る事なりとすれば、それは即ち作る事である。』と。斯くて、*ヴィヨ*は、一面に於ては正に相背反せりと思はるゝ傾向を有し乍ら、他面かの *Denken als Erzeugen* を通じて、*マールブルヒ* 學派の思想を甚だ荒書ながら素描してゐるものとも見做され得るのである。

此處に於て、吾々は再び先のデカルト批判に立返らうと思ふが、既に述べたる如く、以上の如き理由によつて、*ヴィヨ*は、デカルトの所謂直觀認識、或は明晰判明なる認知を以て眞理の規準となす事を許さなかつたのである。即ち、*ヴィヨ*は認識の自發性創造性を主張し、以てデカルトの思想は消極的、受動的に認識を見做すものとして、是を排斥したのである。

併し、*ヴィヨ*は *Cogito ergo sum* を絶對的に眞理として認容しないのであるかと云ふに、そうではなく、彼は、次ぎに眞智識 *scientia* と意識 *conscientia* と稱するものを區別し、以上の如き直觀認識は實に後者に屬するものとしてゐるのである。蓋し、彼の理由

とする所は、眞智識は原因に依る、即ち生産としての認識であるが、Coscio は決して *Sub* を生産するものではなく、單にその標示に過ぎないからである。

次に數學的方法の問題であるが、是に就ては先に述べたるが如く、ヴィヨは二方面よりデカルトに反對してゐると考へられる。即ち、數學的方法そのものの批判と數學的方法が唯一の方法でないと言ふ點よりとである。

古來、西洋哲學に於て、數學を以て自然認識に於ける基底科學としたる第一人者は、體系的意味に於て、プラトーンである。然も、プラトーンはそれを以て至上の認識としたのではない。彼には、數學的「<sup>(五)</sup>假設を破壊し乍ら」*τῆς ἀποδείξεως ἀναπόδεικτον* 進む所の所謂 *Dialektik* があつたのである。正に此點に於ても、ヴィヨはプラトーン主義者であつた。彼も亦、『幾何學及び算術が他の總ての所謂從屬科學よりも遙かに確實であり、少くとも遙か眞理らしく見ゆる事』を疑はなかつたのである。而して、是には又彼の上に述べたる認識論がその根據をなしてゐるのである。斯くて、ヴィヨはデカルトと共に、數學が他の科學よりも遙かに確實なる智識である、と云ふ點に於ては一致してゐるのであるが、然もその理據に至つては兩者異り、デカルトが

明晰判明なる認知を以つて出發點となせるに對し、ヴィヨは數學の確實性が創造者 factor としての神にある唯一の眞理に最も準じたる智識であるからと考へたのである。即ち、彼に依れば、眞理は即ち作られたるものであつて、此意味よりして神にのみ絶對唯一の眞理は存し、限定されたる人間の精神力はこれに到達する事は出來ず、從つて、唯それに準じたるもののみが許されて居り、而して、數學は最もそれに近準せるものである、と云ふのである。換言すれば、數學の確實なるは、『原因によつて論證する』 *probare per causas* が故である。彼言ふ、『算術及び幾何學は、眞に原因によつて論證するものである。而して、何故是等が原因によつて論證なすかと云ふに、斯かる學問に於ては、人間の精神が秩序立て調和せしめ得、且つその論證する眞理の源泉たる、眞理の諸要素を自己の中に包藏してゐるからである。斯くて、是等に於ける論證は、一の創造的なる業であつて、眞理は即ち作られたるものと一致するのである。而して、吾々が物理學に於ては、原因に依つて論證する所のないのは、自然の事物の諸要素が吾々の外にあるからである。』と。

斯様にして、ヴィヨは數學的智識の確實性を確立したのであるが、然も繰返して云

ムが、ヴィゴはデカルト、スピノーザ等と異り、數學的方法を以て至上のものとなせず、彼に於けるこの數學的確實性の確立は、直ちにその批判でもあつたのである。

ヴィゴが數學的確實性を以て至上のものとなさなかつた事には、二個の理據が存すると見られる。今、私は假に是れを神學的及び認識論的理據と名付けて置く。

神學的理據とは、神のみが人間的真理の規準であり、従て神の慧智 *scientia divina* —— 是を彼は形而上學とも稱してゐるが —— は數學的智識よりも高次である、と云ふ點である。此點は、或るヴィゴ研究者の稍々ともすれば無視せんとする點であつて、フリント教授の如きは、ヴィゴの思想體系が基督教より殆んど得たる所なし、と斷言してゐる程であるが、之は餘りに繰急なる獨斷であつて、私は、寧ろ第一期乃至第一相 —— 彼の思想を二分する事が正當であるから —— に於て、ヴィゴの思想は、特に新プラトーン主義的基督教思想を根底とせるものと考へるのである。ゼンティンレが、ヴィゴの第一期の思想に於ては、『彼（カ）にとつて、プラトーン主義者にとつてと同じく、眞實在は尙ほ神が作る所のもの *quella che fa Dio* であり、自然であり、フィキヌス、ブルノーノ、及びスピノーザのあの *Natura* であつた。』と言つてゐるのも其意味であ

るし又、クロイチエの權威も是を最も明白に裏書してゐる。「ヴィニコに於て甚だ強烈なりし信ぜんとの意欲及び、その當時及び生國のカトリック主義に對する彼の精神の完全なる歸依は、プラトーン主義的基督教の認識論及び形而上學に、確く彼を結び付けたのである」ヴィニコが『イタリア人の原始智識論』の第一章の終りに於て次の如く述べてゐるのも亦此間の消息を明かにしてゐる。「神に於てこそ、吾々は人間の真理を尺度しなければならぬ。蓋し、人間の真理とは、吾々自らがその要素を統制し、吾々自らの中にその要素を包藏するものであるからである。而して、又吾々は、ある假設の力に依つて、それを無限に展開し追求し得るのである。この真理を統制する事に於て、吾々はそれを認識すると共に生産するのである。」斯くて、數學が最高至上の學問ではなくして、數學の上に向ほその真理の規準となり、その典型となれる、神の慧智が存するのである。「幾何學は形而上學よりその真理を導き出したし……神の慧智を範型として人間の學問 *scientia humana* を構成するのである。」

以上の如く、神學的理據を以て、數學的確實性の至高至上性を排し去つたるヴィニコは、それと關聯して、是に更に認識論的理據を提出してゐるのである。而して、この

後者が先の理據よりも遙かに有意義なるは申す迄もない。

近世の産みし恐らく最も卓抜なる科學批評家のポアンカレ<sup>(十二)</sup>が、數學に對してなせし結果を要約すれば、次の二點であると見る事が出来る。即ち、數學に於ける精神の建設的自由と云ふ思想と、數學には多分の合意乃至約定の素質 *Carattere conventionnel* が存する、と云ふ二點である。此點に於て、*ヴィユ*は正にポアンカレ<sup>(十二)</sup>に一致する者である。既に述べたる如く、*ヴィユ*に依れば、真理は神にのみあつて、人間はそれに到達せんとして到達する事が出来ない。唯人間に許されたる「最も確實なる學問は、創造なる點に於て、神の慧智に準じるもの、即ち、真理と作られたるものと交互に兌換され得るが如き學問である。」<sup>(十四)</sup>而して、數學は正にこれである。彼云ふ。數學に於て「人は自己の中に線及び數の想像的世界を包藏しつゝ、恰も神が宇宙に於て現實的に作業なすが如く、抽象的に勞作するのである。」と。 *L'uomo, contenendo dentro di sé un immaginato mondo di linee e di numeri, opera talmente in quello con l'astrazione, come Dio nell' universo con la realtà.*

數學は他の科學よりも確實ではあるが、然し、抽象的なのである。これは、*ヴィユ*に

依れば、人間の精神力の根本的缺陷に由來する缺陷である。神は宇宙萬有の創造者なる故、神の智識は最も具體的であるが、人間に許されたる最高の智識は抽象的である、と云ふのである。——彼がその第二相の思索に於て、所謂『新科學』 *scienza nuova* を以て結合せんと試みたのは、實にこの具體性と抽象性とであつた。

〔<sup>十五</sup>人間は事物構成の要素を自らの中に包藏せず、又萬有が自らの外にあると云ふ、その精神の狹隘なる限定の爲め、真理に到達することが出來ない。其處で、彼はその精神の缺陷に乘じ、抽象によつて、表示し得る點と、増倍を許す單位なる二個の要素を創造したのである。二個の假構 *phantasia* である。斯くの如くにして、彼は全てを包攝し得る形と數の世界を構成した。……單に問題に對してのみならず、定理そのものに對しても、要するものは作爲であつて、一般に考へらるゝが如く單純なる思索ではない。……理學者は真理によつてもものを定義する事が出來ず、即ち神の獨特なる真理によつてもものに各々その本質を指定し、それを生産する事が出來ず、從つて、彼は言葉を定めて、神を範型として、恰も神が其より創造するが如く、素材なくして點、線、面等を創造するのである。〕從つて、『吾々が幾何學に於て論證するのは、吾

吾が生産するからである。』*Geometria demonstramus, quia facimus* 事となり、既に早く『現代學問研究論』に於ても、幾何學は詩と同じく、想像的なるものを與件としてゐるのであるから、必ずしも詩と無關係であるとは云へない、と特筆してゐるのである。斯くて、ヴィユは、一面に於て、數學に於ける抽象性及び假構性を指摘して數學的真理の絶對的ならざる事を主張し、他面に於て、數學に於ける精神の創造性を擧げて、科學としての基礎づけをなしたのである。是を要するに、彼の神學的及び認識論的根據に由來する科學批判は、デカルト流の思想を排斥し、寧ろ、今日より見れば、當時の學界の平準線を遙かに飛破したるものと謂ふべきである。但し、一言して置くが、以上の如く論じ來れば、ヴィユが古へのプロウタゴラス流の *homo mensura* 論の主張者であるかの如き疑懼が生ずるであらう。然し、既に述べたるが如く、*Solipsismus* は彼の最も忌避した思想であつて、『總ての科學的真理——生産されたる全ての真理——が永遠にして不變』なるは、彼の疑はなかつた所である。これは、生産する者が彼の所謂理性であつて、而して、理性はものの普遍妥當性を追求するからである。唯、彼の主張せんとする點は、認識に於ける精神の自發、自足性である。

數學的方法そのものを斯く批判し來れるヴィヨにとつては、從つて、デカルトの亞流の如く、「幾何學的系列の下に論證する」ordine geometrico demonstrare 事を以て唯一の方法と見做す事は出來なかつたのである。寧ろ、彼は「ものの本性」 natura rerum に依つて種々色々の方法の存する事を主張したのである。「イタリア文人新聞への答辯」に於て、彼は次の如く明言してゐる。「デカルト<sup>(十六)</sup>學徒が一般に方法と稱してゐるものは、幾何學的方法なる唯一種の方法に過ぎない。然るに、課題があればあるだけ、種々色々の方法が存在する。辯術には辯術の方法が、詩には詩の方法が、歴史には歴史の方法が、幾何學には幾何學の方法が、論理には論理の方法が、支配するのである。」

斯く、ヴィヨは、その第一期の思想に於て、數學的方法を以て唯一の方法となさず、外にも等しく妥當なる方法が存する事を力説してゐるのである。然し、此期に於て、既に彼の第二相の思想の特徴なる精神科學主義を明確に抱いてゐたと速斷するのは誤りである。唯、彼の眞理論が、よし素描式であるにせよ、幾分かのマールブルヒ學派の精神と相通するものがある、と同じ程度に、彼の科學論は、幾分その精神に

於て西南學派と通ずる所があるのである。

- (一) 『イタリヤ人の原始智識論』第一章
- (二) Arist. *Metaph.* 982<sup>a</sup>2
- (三) Oeuvres de Vico, p. 235
- (四) *De antiquissima etc.*, I, II
- (五) Resp. 533 C
- (六) Oeuvres de Vico, p. 238
- (七) Ibid., p. 236
- (八) R. Flint, op. cit., p. 69
- (九) G. Gentile, op. cit., p. 53
- (十) B. Croce, op. cit., p. 20
- (十一) Oeuvres de Vico, p. 245
- (十二) D. Parodi, *La philosophie contemporaine en France*, Paris 1920, p. 217
- (十三) Oeuvres de Vico, p. 222
- (十四) B. Croce, op. cit., p. 29
- (十五) Oeuvres de Vico, p. 220-221
- (十六) Ibid., p. 164

## 七

ヴィヨはその思索の第一相に於ては、如上の諸問題を取扱つたのであるが、その第二相に於ては、第一相に於て積極的基礎づけを受けなかつた精神科學が、最も確實なる學問として認めらるゝに至つたのである。従つて、ヴィヨが、特にデカルトと對照して、歴史的に重要な地位を獲得すべきであるのは、主としてこの第二期に基くのである。

數多き獨逸の哲學史家の中にあつて、<sup>ミ</sup>ザインデルバントを除いて、ヴィヨを稱揚したる殆んど唯一人なる<sup>ミ</sup>ディルタイが、次の如く述べてゐるのも、實にこの第二相に於けるヴィヨである。『<sup>ミ</sup>ヴィヨ、テュルゴ、コンドルセ、ヘルダーは、哲學的目標を有せし最初の萬國史家であつた。彼等が諸科學を相互に結合したる——例へば、ヴィヨが法律學と言語學とを、ヘルダーが博物學と歴史とを、テュルゴが經濟學、自然科學及び歴史とをの如くに、——根據となりし、その包攝的洞觀は、近代歴史科學の第一歩を開いたのである。』…… Der umfassende Blick, durch welchen sie Wissenschaften miteinander

kombinierten, wie Vico Jurisprudenz und Philologie, Herder Naturkunde und Geschichte, Turgot politische Oekonomie, Naturwissenschaften und Geschichte, hat der modernen Geschichtswissenschaft erst ihre Wege gebahnt. 私も、ヴィコが歴史科學の第一歩を開いた一人である事には全然同意する者であるが、然し、私は、ドイツの『法學と言語學とを結合した』と云ふ言葉は至當でないと考へる。蓋し、ヴィコは、彼の所謂哲學と言語學とを結合する事を以て理想としたのであつて、而して、彼の所謂法學とは、その『萬國法の原理及び目的の統一論』 *De universi juris uno principio et fmo uno* に明示せる如く、或時は所謂『神性及び人間的なる事物の智識』 *scientia rerum divinarum et humanarum* と稱せられて殆んど智識全般、學問全般を指し、又或時は、『哲學、歴史、及び法律を實際に適用する特種の術』であると謂はれてゐるからである。

ヴィコがその第一相の思索に於ては、倫理學の如きを單に最下級の學問としてゐた、と云ふは事實であつて、かの『イタリヤ人の原始智識論』第一章第一節の明白に立證する所である。然し乍ら、既に述べたるが如く、彼は當時に於て數學の如き學問を以て唯一至上のものとしてゐたのではない。寧ろ、デカルト學派の唯理主義、數

學主義の排斥が、彼の第一相に於ける思索の全部を占有してゐたと云ひ得るのである。『唯理主義に抗して一の歴史主義を擁護した。』事が、ヴィヨの使命であつたとすれば、彼の第一期に於ける思索は、正にその準備と見做すべきである。彼が第一相に於て、デカルト流の數學的智識を批判し、その占めたる高さ地位より、占むべき地位に低下せしめたるは、第二相に於て、デカルト學徒の捨てて省なかつた歴史、法學、文學、社會學等の諸學問を、そのあるべき場所にあらしめんと努力せし豫定行動であつたと見られるのである。彼の極めて初期の作なる『現代の學術研究方法論』に於ける『現代人は、眞理の認識を以て唯一の研究目的とし、確實と見ゆるが故に自然を研究するが、人間の自由に基いて不確定なりとの理由で、人間の本性の研究を怠つてゐる』との慨嘆は、彼の一生を通じての使命を示すものである。

ヴィヨの第一相に於ける思想が主として『伊太利人の原始智識論』より窺ひ得らるるが如く、彼の第二相の思想は、『萬國法の原理及び目的の統一に就て』と『新科學の原理』とに現れてゐる。従つて、私は今第二相の思想を見んとするに當つて、前者より始める事にする。其處に於て、ヴィヨは先づ、恰もライプニッツの *vérité de raison* と *vérité*

de fait との別の如く、認識の源泉を理性 *ratio* と權威 *auctoritas* との二となす事より出發してゐる。理性の原理はものの必然性 *necessaria naturae* にあつて、權威の原理は人間の自由意志の決定 *placita humani arbitrii* に存するとして、『哲學<sup>(五)</sup>はものの必然的原因を追求し、歴史は意志行爲を示す證左であると云へる。』と云つてゐる。而して、彼の意圖する處によれば、前者を研究する者は哲學者であつて、後者のそれは言語學者である。更に進んで彼言ふ。『真<sup>(六)</sup> *verum* と確實 *certum* とは、恰も通常是等の反對なる偽と疑とが區別さるゝが如く判別されねばならない。……真とは思惟とものとの一致であり、確實とは疑ひなき信じである。而して、この實在系統との一致は實に理性と稱せらるゝものである。……真が理性より結果すると等しく、確實は吾々の個人的經驗 *astrosia* の、或は他人の證左の、權威に依據するものである。』但し、彼が此處に思惟と實在との一致を以て真としてゐるのは、決してかの *Abbildtheorie* の如きを意味するのではなく、彼に於ては、飽迄 *verum ipsum factum* であつて、生産さるゝものが生産されたる意に於て、思惟と實在系統との一致なのである。又、或意味で、*Erzeugen* が直ちに *Erzeugnis* となるのである。

吾々は、*グイユ*の思索展開の第一相に於て、如何にプラトーン主義的神學思想が大影響を及ぼしてゐるかを見たのであるが、同様に、その第二相に於ても、是を發見するのである。「從つて、神に關し人に關する事物の智識に就て、私は、その始源、その復歸、及びその状態なる三點を觀察するであらう。而して、その始源によつてそれらの智識は總て神より發し、その復歸に依つて、總ては神に歸り、その状態によつて總ては神に存するのである。」とは、『萬國法論』の説く處である。從つて第二相に於ても、純粹眞理は人間に許されてゐないのである。以下、少しく彼の述ぶる處に傾聽する事にしやう。「眞理を認知する事が出來ない爲に、人間は、確實性 *certo* に到達しやうと努力する。其結果、智性は眞智識 *scienza* の満足を得る事が出來ず、少くとも意志が意識 *coscienza* に甘んずる事になる。……哲學は、理性を思念し、それよりして眞理の智識が生ずるが、言語學は權威に從つて人間自由意志の作爲を研究し、それより確實性の意識が生じる。 *La filosofia contempla la ragione, onde viene la scienza del vero; la filologia osserva l'autorità dell' umano arbitrio, onde viene la coscienza del certo* 斯くて、言語學者なる者は、次に擧ぐるが如き言語及び事實を研究する、文典學

者、歴史家、批評家等を總括して指すのである。法律、習慣等の如き國民史の内的事實と、戰爭、平和及び同盟の條約、商業、航海等の外的事實等である。斯くて、哲學者がその推理に、言語學者の權威より導き出されし確實性を賦與する事を怠れば、半途を以て満足せる者と稱すべく、又、言語學者が、事實に對して哲學的推理より曳出し得る眞理性を賦與する事を怠れば、是れ亦、同様の缺陷を有する者である。：：人間自由意志の作爲の研究は、本質上甚だ不確實なものであるが、その確實性と決定性とを一般意識 *sensu commune* より受けてゐる。而して、一般意識とは反省なき判斷であつて、階級全般、國民全般、人類全般の參與するものである。』

偕て、この思索を各代表的個別科學に就て考察せんに、便宜上、私は今此處に單に自然現象研究としての物理學の如き最も典型的なる自然科學と、數學と、——但し、數學と物理學との關係は今問題に上つて來ない——歴史の如き最も範型的なる精神科學との三個を擧げる事にする。先づ、單なる自然現象の學としての物理學と、幾何學の如きものとを對照して見んに、ヴィユに依れば、自然は要するに神の生産したるものであるから、自然に對する完全なる智識は神にのみ保留され、従つて、物

理學には眞理はない事となり、唯確實なる意識のみが許され、他面幾何學の如きは、精神活動の所産に掛るものであるから、眞理——假令その眞理が全體として第二次的のものであるにしろ——を有する事となる。而も、それは抽象的にして假構的のものであるから、具體的な所謂權威を缺く事になる。斯くて、ヴィヨにとつては、物理學も數學も共に完全なる學問ではなくるのである。次に歴史であるが、彼はその第二相の思想に於て、殆んど常に歴史を以て權威による即ち具體的な智識の代表的なるものとし、上述の論理的思惟と倫理的意欲の二分に於ては、常に後者の世界の指標としてゐる様である。然るに、一面に於て、歴史程精神の所産として確實なるもの、典型的なるものはない。歴史の世界は、實に人間の理念、意欲、感情、行爲等の所産以外他の何ものでもない。然も、眞理は作られたるものである。されば、ヴィヨにとつては、歴史程確實なるものはなくなる事になる。斯くて、結果に於て、歴史の世界は所謂『具體的普遍』 *concreta universalitā* となつて、歴史に於て、初めて先の眞理の智識と確實の意識が一致する事となり、ヴィヨの理想としたる學問が發見された事となる。彼が、歴史的實在を以て、數學的實在よりも、『より多くの實在性』

を有すと稱してゐるのも、此意に外ならない。又、クレムが賢明にヴィヨの理想としたる學問を、<sup>(+)</sup>Entwicklungsphilosophie des Geistes と稱したるも此謂である。

斯くて、ヴィヨはクロイチェも指摘してゐる様に、明かに、以上の如き思索の歸結として、一面に於ては、人間と社會の經驗科學の確立を主張し、他面に於ては、彼の所謂理性と權威、哲學と言語學の統合なる、<sup>(+)</sup>Deilタイの、<sup>(+)</sup>erkennen を通じての自然科學に對する <sup>(+)</sup>verstehen を通じての精神科學の暗示とも考へ得らるゝ、一の新しき科學の確立を叫んでゐるのである。

終りに、私はクロイチェの次の數語を以て結辭とする。『彼の<sup>(+)</sup>哲學と言語學の統合は、デカルト主義の結末なる十八世紀の懷疑思想及び唯智主義に對する、歴史の擁護となつて、又、理想と實在、範疇と經驗とを和解せるカントの <sup>(+)</sup>sintesi a priori に於て、更に又、十九世紀の歴史主義がその最高頂に達したるヘーゲルの歴史哲學に於て、再生してゐるのである。』

以上を以て、私の『デカルトよりヴィヨへ』は終るが、實際の所ヴィヨは讀み難い。單に

彼の表現が難澁であると云ふのみならず、彼の思想とそのものの中に、新舊の思想が時の系列を考慮せずに現れて居り、且つ相矛盾する思想が混在してゐるからである。未熟なる私が、果して彼の思索を忠實に把握し得たかどうかは甚だ疑問であり、又、彼の眞の史的意義が賦與せられるのであるかも知れないと考へられる、彼の詩に對し、神話に對し、倫理學に對し、其他歴史的事實に對する思索を、私は全然敘述してゐない。唯、私は、標題の示す如く、デカルトの直後に出で、然も彼と全く異つたる思想傾向の所有者としてのヴィヨを記述する事に努力した心算である。

- (一) W. Windelband, Die Gesch. d. n. Philosophie, Leipzig 1922, S. 597 ff.
- (二) W. Diltheys gesammelte Schriften, Band 1, Leipzig 1923, S. 112
- (三) O. Klemm, op. cit., S. 38
- (四) Oeuvres de Vico, p. 152
- (五) Ibid., p. 178
- (六) Ibid., p. 186
- (七) Ibid., p. 185
- (八) 『新科學の原理』二章五節より十二節
- (九) B. Croce, Saggio sullo Hegel, Bari 1913, p. 246
- (十) O. Klemm, op. cit., S. 44
- (十一) B. Croce, La filosofia etc., p. 251